

<学術講演会>

21世紀に向かって進む中国の社会学研究*

—社会移行加速期中の中国社会学の展望—

鄭 杭 生** 著
李 為*** 訳

再び、関西学院大学社会学部の皆様へ中国社会学と中国問題について話をさせていただくのは、本当に嬉しく存じます。今回は1992年3月、当時の学部長佐々木薫教授のご招請を受け、唯一の外国人研究者として、関西学院大学社会学部創立三十周年の祝典にお招きくださったことをあらためて感謝を申し上げます。祝典大会で、「転換期社会の角度から見る中国の社会変動」という記念講演もさせていただきます。今は、立命館大学の産業社会学部の客員教授（任期一年）として招請されています。現在、当大学では大学院生と学部生のゼミナールを一つずつ担当し、主に当代中国社会と中国社会学について講義をしています。

ここで、遠藤惣一教授と高坂健次教授のご要請をきっかけに、この貴重な機会を下さったことと、皆様と先生方のご清聴にこころから感謝を申し上げます。中日両国社会学界の交流を促進することは非常に重要なことであると思います。今日の講演内容が中日交流に少しでも役立つことができれば、幸いです。

遠藤惣一教授と高坂健次教授から頂いた今日の講演テーマは、「中国社会学の研究動向」ですが、言葉の理由で、「21世紀に向かって進む中国の社会学研究」に変えさせていただきました。大きなテーマですし、かぎられた時間ですので、いくつかの要点を中心にお話したいと思います。残念ながら、私は日本語を話せませんので、李為君に日本語に翻訳してもらいます、社会学部の『紀要』に載せていただくことになっていますので、

皆様にはのちほど読んで、ご意見をいただければ、と思います。

一、

私に「中国社会学の研究動向」というテーマを下さったのは、おそらく中国の社会学が現在、何を研究しているのか、その研究はどの程度のものかについて求めておられるのだらうと思う。偶然かも知れないが、このテーマは、中国社会学界の関心問題でもある。四年前、すなわち1994年10月、中国社会学界では私が研究課題グループ長となり、「(中国大陸)社会学学科研究状況と発展趨勢」という研究プロジェクトを設立した。このプロジェクトの主旨は、中国社会学が1979年より回復、再建して以来の進展状況と問題点を明らかにしたいということにあった。国の社会科学基金“九五”計画（1996-2000）に適切な建議を提案するためである。

15年来の社会学の発展状況を全面的に総括し、効率よくこの課題を完成するために、さらに一つの専門家指導グループと課題実行グループを設けた。専門家指導グループには、全国社会学学科評議審査と企画グループがあるが、これを除いて、他の専門家も招いた。全部20人で、かれらは陸学芸、何肇發、王輝、呉鐸、楊魁孚、田雪原、宗書偉、葉小文、陶春芳、劉中栄、劉君君、谷迎春、周鑾書、宗林飛、趙子祥、劉敏、曾毅、王思斌、李強、鄭杭生である。これらの専門家は研究課題

*キーワード：中国の社会学研究 社会変容 社会運営（この論文は1998年10月29日に関西学院大学で講演した内容である。）

**中国人民大学社会学部教授 中国社会学会副会長 日本立命館大学1998年度客員教授

***関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程